

初期レッシングの宗教思想の一考察

―その「合理論」の様相について―

玉井 実

序 論

本論ではドイツ啓蒙思想の旗手であるレッシング（一七二九―一七八一）のベルリン修業の時代（一七四八―一七六〇）における神学的著作や断章から、それらの多角的な意味での「合理論」を基調とする、後期の神学や、宗教哲学、文学作品の基本理念となる有力な手懸りを見出し、その積極的な意義を考えてみたい。そもそもこのような課題が提起されるのは、レッシング自身がすでに初期の段階より、彼個有の思想を方向付け、その方法、および確信を抱いてきたからに他ならず、かような見地より彼の既成神学への批判を骨子とする合理的神学、および実践性を目指す倫理や寛容などの理念に、種々の角度から言及し、新しい発想を有していたからである。このような観点から本論では初期の著作、*Rettingen des Hieronimus Cardanus* (1754) と *Gedanken über die Herrnhuter* (1750) を主要文献とし、更に小断章、*Das Christentum der Vernunft* (ca. 1752) の内容をも併せて、次のような特色ある二つの視点の意義を中心に論究することを意図している。

先ず最初に、上述の *Rettingen des H. Cardanus* の主題である *Rettung* (弁護) の意義と影響について述べることにする。そもそもこの概念はレッシング自身の生涯にわたる哲学、神学、さらに文学などのあらゆる著作の中で極めて特異な位置を占めているので、彼の著作活動のいわば心情的バックボーンとして考えられる。本著作ではカルダーヌスの諸宗教の比較的方法に対して、レッシングはその異端性を弁護すると同時に、それに関する批判や吟味により彼自身の「合理論」を展開している。さらにその広義な意味では *Gedanken über die Herrnhuter* についても、ヘルンフート派の精神的苦悩に対する「弁護」と、彼らの精神的奮起を促して、さらにこの概念を多様化し、その充実を画ることにはしたい。

次にはこれらの著作や断章が当時流行した「理神論」(Deismus) との類似した傾向について、その意義を考えることにしよう。彼自身、本論の著作の中で、その実名を直接には挙げていなかったが、その合理的内容を極めて強調していたので、それは広義の理神論に極めて類似していた。それ故にかような見地からさらにこの問題を究明する必要がある。彼にとって理神論との関係は、後年に至ってライマルスの *Wolfenbüttel Fragmente* (『ヴォルフエンビュッテル断章』) の公表問題で周知のように、当時の教会当局との軋轢を生じたことから、それを主張するには極めて慎重な対応がなされていた。かような時代的背景からして、彼の合理論は極度な急進性を避けながら、既成神学とは是々非々の態度を執りつつ、その超自然的概念を払拭して理性認識に適合しうる自然神学、本論では小断章、*Das Christentum der Vernunft* (ca. 1752) について先ずは考察することにしよう。それは彼の自然神学によるキリスト教の根本的な解釈がよく表明されているからである。さらに先述の主要な二著作については、その理神論的な特質をなす比較宗教的な方法や自然道徳を促進するための記述内容について、改めて問うことにしたい。

以上の観点から、レッシングの初期宗教思想の合理的特質を考えるならば、かような傾向は彼の後期の主要著作にも連綿として受け継がれていた。このような視点に立つて本論は、十八世紀中葉におけるドイツ啓蒙主義の合理的な

宗教理念のうちに、一つの発展的様相を洞察し、ここにその一端を論述するものである。

第一章

かような視点から、まずは *Rettingen des Hieronimus Cardanus* (『H・カルダーヌス弁護』) を中心にして、レッシングにおける「弁護」の概念を明示して、彼の「合理論」の特質を考え、さらに *Gedanken über die Herrnhuter* (『ヘルンフート派に関する思考』) についてもその考察を進めることにしよう。

レッシングは一七五一年より一年間学士号取得のためヴィッテンブルク大学に籍を置いたのであるが、宗教改革当時の歴史研究のうちから *Rettung* (弁護) の問題に大なる関心を抱き、その四篇のうちの一つ、*Rettingen der Hieronimus Cardanus* (1754) を研究の対象とした。⁽¹⁾ そもそも彼にとって「弁護」の概念は、彼の歴史的著作では極めて特殊な立場を占め、一つのジャンルとしてさえ認められている。その概念の意味するところは、過去の歴史上の個人や団体に対する悪意や偏見による不当な評価や干渉を、彼自身の心情や倫理観から「弁明」(Vindication) し、あるいは「正当化」(Rechtfertigung) することによって、その不正を曝露し、雪冤するとともに、それらを公正な立場から批判し、吟味することであつた。⁽²⁾ 従つてかような「弁護」の概念はレッシングの著作では神学上の本来の意味としての「救済」(Erlösung) の観念は、本著ではおよそ見当らないのである。

さて本著の歴史的背景は十六世紀イタリアの著名な自然哲学、医学、数学などの異常な天才、H・カルダーヌス(Cardanus) が、自らの主著 *De Subtilitate* ⁽³⁾ の第十一書の中で、不敬虔極まりなく四つの既成宗教を比較して、それらに批判を加えたことから、当時の教会当局より無神論の嫌疑を受け、懲罰の対象となつた事実に対するレッシングの「弁護」と、彼自身の主張であつた。レッシングは当著作に対する教会当局の偏見と権威の盲従を配慮しつつ、カルダーヌスの言葉を借りて次のように述べている。

「人間は昔から言語、習慣、そして戒律の点で、人間同士の間で異っていることは、動物たちがわれわれ人間と異っているのと何ら変らぬくらいである。キリスト教徒は回教徒との間で、またユダヤ教徒はキリスト教徒と回教徒の間で、彼が地獄に落ちた犬ほどの評価も受けないのである。彼らは嘲笑され、迫害され、殴打され、掠奪され、奴隷にされ、殺害されるなど、最もひどい凌辱を受け、最も惨めな苦役を課せられる。……」

Die Menschen sind von jeher an Sprache, Sitten und Gesetzen ebenso sehr unter sich von einander unterschieden gewesen als die Tiere von ihnen. Bei den Verehren des Mahomets wird ein Christ und bei beiden ein Jude nicht höher geschätzt als der verworfenste Hund; er wird verspottet, verfolgt, geschlagen, geplündert, ermordet, in die Sklaverei gestoßen, durch die gewaltsamsten Schändungen gemäßhandelt und mit den unsaubersten Arbeiten gemartert,⁽⁴⁾...

かような動機に基づいて、カルダーヌスは四つの既成宗教、即ち偶像礼拝の多神教、およびユダヤ、キリスト、回教よりそれぞれの宗教の正当性と優越性、そして他宗教への批判を彼の鬼才ぶりを発揮して語っているが、その中でも最も注目されるのは後の二つの啓示宗教であった。

先ずはキリスト教では次の四つの根拠からその優位を主張している。一には、キリストにおける「予言」(Weissagung)の成就とその完全さであり、それは旧約時代にすでに用意されていたが、回教にはそれは全く認められない。二には、キリストによる「奇跡」(Wunder)の偉大さであり、その実例として新約の「ラザロの蘇生」(ルカ、十六・二〇―三十一)などが挙げられる。一方回教の奇跡には確実な証人が欠如している。三には、キリストの「戒律」(Gesetz)の合理性と完全なる「徳性」(Tugend)を保有しており、彼の戒律は「自然道徳」(die natürliche Moralität)ならびに「自然理性」(die natürliche Vernunft)による哲学に矛盾しないのである。そしてイエス自身の生涯の卓越した倫理性こそ、いかなる人間もそれを凌駕することはできない。四には、キリスト教の内面的な優越性は、新約後において少数の全く素朴な人々により、「異教」(Heidentum)の国々に布教し、世界的発展をなした。以上の観点からキリス

ト教の優位が確証される。⁽⁵⁾

一方の回教もまた五つの根拠を挙げて反論している。まずは回教こそ純粋な「一神教」(Monotheismus)であるのに、対して、キリスト教は万物の最高、永遠の創造主の神に等しく「神の子」(der Sohn Gottes)の名称を与えたことに、天は激怒し、地は戦慄するものだ。二にはキリスト教の偶像礼拝は「多神教」(Polytheismus)に近いこと。三には、回教世界のキリスト教世界への勝利は、回教が唯一神の正当な「信仰の証し」である。四には、有徳性と戒律に関しても回教は厳然としており、キリスト教徒らは殺人、賭事、姦淫、潰神などの悪徳がびまんしている。五には、奇跡についても、キリスト教では「物語られた」(erzählt)ものであるのに対して、回教では「現存する」(gegenwärtig)ものである。⁽⁶⁾

以上の両宗教の比較からカルダーヌスが教会当局から非難された原因についていえば、キリスト教の正統信仰と他宗教とをかくも大胆に比較したこと自体が当時としてはあまりにも尊大で、それだけで無神論の嫌疑に値したのである。レッシングはカルダーヌスのこのような既成宗教の忌憚のない比較そのものは賞讃し、それを弁護し、正当化したのであるが、その比較の方法には不満を抱き、それを批判したのである。その理由として彼は二つの観点からそれを論究している。まずは正しい宗教の諸根拠を軽視したこと、次には偽りの宗教の諸根拠を強調したかということである。⁽⁷⁾ 前者の立場からすればカルダーヌスといえどもキリスト教を主体的に語ることは当然であり、その歴史的根拠を強力に述べているが、その骨子は旧約の予言者たちが伝播したキリストの受肉以前に由来するもの、イエスの現存当時の奇跡に由来するもの、そして新約時代のキリスト教の布教による成果であるが、その他に先述したキリスト教の理性的解釈は彼のラディカルな見解であって、次のように語っている。

「カルダーヌスはキリストの教えのすべてが道德と常識的な世間の知恵(哲学)とは競うものを何も含まず、あるいはそれ

とのいかなる一致ももたらされないことを、むしろ主張している。「ラテン文……キリストの戒律は道德哲学、あるいは自然哲学に反しているものは何も含まれない」というのが彼の個有の言葉である」

Er behauptet vielmehr, daß die ganze Lehre Christi nichts enthalte, was mit der Moral und mit der naturalischen Weltweisheit streite oder mit ihr in keine Einstimmung könne gebracht werden: [nihil continent praecepta Christi a philosophia morali aut naturali absonum] sind seine eigne Worte.⁽⁸⁾

レッシングはカルダーヌスのこの表現を、十六世紀までに記述されたあらゆるキリスト教弁護のうちで最も優れた内容の書であると述べている。彼のこのような見解の内容はまさに「理神論」との類似性が考えられると同時に、カルダーヌスのキリスト教観の革新性に大なる「弁護」と「正当性」を強調しているのである。

しかしこのようなカルダーヌスの諸宗教の比較の方法は、結局は偽りの宗教の諸根拠に対してなされたことになる。ここでレッシングはその理由付けを「民事訴訟」(die bürgerliche Handel)と「学問的論争」(Streitigkeit)との相違の比喻をもつてなしている。⁽⁹⁾ 前者の目的は利得がすべてであり、一方が利益を得ると、他方は損失を蒙るもので、相手側の立場を考える必要はないのである。然るに後者の目的は「真理」(Wahrheit)そのものであり、両者のいずれが勝利を得ても結果は同じであるから、その場合に敗者は「誤謬」(Irrtum)を喪失するだけに過ぎないのである。カルダーヌスの真の意図は四つの宗教を単に比較するのではなく、キリスト教に極めて有利に論理を展開するためにあつたと、レッシングは考え、いわばキリスト教のための「民事訴訟」としてであつた。一方回教に対してはキリスト教との著しいコントラストを与え、逆に民事訴訟の相手側のような不利な立場を想定している。その理由は十六世紀イタリアの時代的背景からして、このような表現はカルダーヌスの悪意からというよりは、回教に対する無智や偏見のために極めて遺憾な結果を招いたものだ⁽¹⁰⁾と、彼は推察していた。

それ故にレッシングはかような「民事訴訟」ではなく、「学問的論争」として二つの基本的見解を述べている。その

特質は時代の子である彼の啓蒙主義的な精神が色濃く反映されており、その前者はカルダーヌスを弁護して、キリスト教の宗教性を哲学的な自然理性に矛盾のない道德性に力点を置いていたことであり、その理念はレッシングの後期におけるキリスト教観に大なる影響を与えていたことは言うまでもない。⁽¹¹⁾一方後者の「学問的論争」の立場からは、回教とそれ以外の三つの宗教の特質の相違についてその根本的な違いを強調している。その尤もなる理由はキリスト教ユダヤ教、そして異教の特質は不合理な「秘儀・神秘」(Geheimnis)の概念を含有しているので、レッシングの啓蒙的な理念からすれば、それらは批判と矯正の対象となっていた。⁽¹²⁾この概念に関する理性による批判と合理的宗教の特質については、次章の「理神論」との類似性の関連からさらに述べることにしたい。

然らば回教が彼にとって合理的宗教の特性を擁護した理由については、およそ次のように述べている。先ずはその教義の主題が唯一神の信仰、二には、「来世の応報」(eine zukünftige Strafe und Belohnung)という信仰、かような神の本質とコーランの教義を順守すれば十分であり、彼は以上の観点より回教の宗教性にその本質を見出している。まさにそれが教祖マホメットの誤謬なき予言とその確信であって、奇跡を行う必要はなかったのである。その理由は奇跡とはマホメットのように各人がその「試金石」(Probierstein)を有する事柄だけを教理として説く者にはそれを必要としないのである。また回教における武力行使の非難も、レッシングは擁護している。その理由としては、創造神の唯一性と来世での応報を誹謗する頑迷な異端者や敵対者には、その行使が是認されるべきだと言うのである。⁽¹³⁾

このようにレッシングはカルダーヌスの忌憚のない諸宗教の比較的見解により、彼の真実の意図に迫り、彼を弁護すると同時に、辛辣に吟味したことは、レッシング自身の宗教理念がルター派の正統信仰を必ずしも踏襲せず、自らの自由裁量を求めて批判的であったことに他ならない。⁽¹⁴⁾かくして彼の *Retungen des Hieronimus Cardanus* において *Retung* の意味するものは、「弁護」であるとともに、「自己の「正当化」の主張や「批判」として、大いに強調していたものと言えるであろう。

さてかような観点から一方の著作 *Gedanken über die Herrnhuter* (1750) (『ヘルンフート派に関する思考』) について考察を進めてみよう。

言うまでもなくヘルンフート派⁽¹⁵⁾は十七世紀のドイツ「敬虔主義」(Pietismus)⁽¹⁶⁾の別派を形成するに至り、「モラビア兄弟団」(Mährische Brüder)⁽¹⁷⁾によって「アウグスブルク信仰告白」(Das Augsburgische Bekenntnis)⁽¹⁸⁾に準拠して、ドイツ地方教会という範囲内で、特殊な敬虔主義的な訓練により彼らの宗教運動は活性化していた。その傾向としてルター派の「正統信仰」(Orthodoxie)⁽¹⁹⁾に対する改革運動としての、ルター派信仰の内面化を促進して、精神の敬虔性を感じるように、純粹なバイブルの記述に基づいて、厳格な信仰規律を重んじていた。ここにヘルンフート派の平信徒に至るまで「実証的な」(positiv)宗教意識の覚醒を通じて、その革新的な禁慾をもたらしていたが、そのことは極めて主観的な宗教感情を抱いてきたのである。

然るに正統派神学者たちは宗教改革当時の強い情熱を失ない、その後に至り教義学の煩瑣な体系に固執して、素朴なヘルンフート派の信者たちに神学者特有の論争癖、形式主義、不寛容な態度で臨んでいた。そのために彼らは、素より教義学的な知識に乏しかったので、それらの神学者たちに卑下され翻弄されてきたが、このような実情にレッシングはヘルンフート派を「弁護」すると同時に、彼らの精神的な奮起を促したのである。

さてレッシングはこの小著作の中でヨーロッパ精神史の一視点より、時代の変遷とともに知識と信仰の一致した価値付けを道徳上の進歩と考えて、彼の所見を述べている。それによると彼の生存した十八世紀の啓蒙時代に至っても「學術」と「倫理」との不均衡に関するテーマはレッシング父子が強く共感していたと言われており、本著に集約された主題はまさに次のような表現にみられる。⁽²⁰⁾

「人間は行動すべく造られているのであって、詭弁を弄するために造られてはいない」

Der Mensch ward zum Tun und nicht zum Vernünfteln erschaffen.⁽²¹⁾

その同じ表現では、学術的なものは進歩しているが、人間の道徳的なものは改善されていない、ということとで学術と倫理の不均衡に彼らは大いなる不満を感じていた。かようなヘルンフート派に対する実情認識からレッシングは次のように述べている。

「けれどもその（敬虔主義の）真理は私が賞讃することによって、何ら不都合になる筈はない。有徳と尊厳とが同じく諸君たち（ヘルンフート派）の精神を陶冶するに当って殆んど無益であったとは、なぜそのようなになったのであろうか。人が邪悪な心をもって生活する場合には、正当な信仰が何の助けになるであらうか。もしも諸君たちが学問と同じく信仰厚い後継者としてわれわれに委ねてきたとすれば、何と幸いなことだろう」

Doch die Wahrheit soll bei meinem Lobspruche nicht leiden. Wie kann es, daß Tugend und Heiligkeit gleichwohl so wenig bei euren Verbesserungen gewann? Was hilft es, recht zu glauben, wenn man unrecht lebt? Wie glücklich, wenn ihr uns ebenso viel fromme als gelehrte Nachfolger gelassen hättet!⁽²²⁾

と、レッシングは正統神学者との軋轢に対するヘルンフート派への心情的な援護と、彼らがなすべき宗教上の真実の課題について、彼特有の広義な「弁護」の概念を強調している。この問題についてレッシングは、古来よりの知識と信仰の歴史の変遷のうちから実践倫理上の進歩の概念と評価を主体として論じているが、十八世紀のヘルンフート派に要請されるのは、かような意味での知識と信仰との一致協調であった。そこに彼は伝統の正統信仰を「非現実的な神学」(Gottesgelehrtheit)と啓蒙的な宗教理念、即ち倫理主体の「実践的な哲学」(Weltweisheit)との真正なる融合と模索を試みて、前者の神学からは実証となるものによって信仰を要請し、後者の哲学からは信仰によってその実証

となるものを支持すべきだと考えていた。⁽²³⁾ 然るにこのような両概念よりレッシングが真に要求したものは、啓蒙主義の当時代では、中世の如き朦朧とした時代よりも、真実のキリスト教の実践が困難になったという現状の認識から、彼は次の比喻をもって、

「われわれは認識においては天使であるが、実生活においては悪魔である」⁽²⁴⁾

Der Erkenntnis nach sind wir Engel, und dem Leben nach Teufel.

と述べている。その矛盾こそレッシングの最も「弁護」の対象としたことであり、ヘルンフト派の現実における極めて困難な宗教上の矛盾であった。

かくしてレッシングにとって *Gedanken über die Herrnhuter* に関する *Retung* (弁護) の把握の仕方はヘルンフト派の純粋な宗教的素朴さの心情を理解し、その精神を高揚していた。それと同時に彼の啓蒙主義は時代の変遷とともに人倫に仕う道徳上の進歩を理想に掲げていたので、この小著作の意義は彼の生涯を貫徹する広義な意味での「弁護」の觀念に適合するものであった。そしてこのような本著の主題の発想とその大なる理念は彼の最後の神学的著作 *Die Erziehung des Menschengeschlechts* (1781) (『人類の教育』) の原型をなすに至り、ここにレッシングのヘルンフト派に対する思考の本来的意義を見出すことができよう。

第二章

本論の著作の内容からレッシングに共通する精神の方向と特質より、ここでは「理神論」(Deismus)⁽²⁵⁾との関連から、その本質的な理念について述べることにしよう。この問題を提示する根拠は彼の合理主義の神学が極めて理神論に類似しているからであるが、さらにその時代的背景とドイツ宗教思想界との関連からも、複雑に入り組んでいると思わ

れる。

理神論はそもそも十七世紀中頃から十八世紀中頃まで約一世紀の間、イギリスを起点に大陸のドイツへも波及したが、その内容の主眼点は二つの特色を有している。先ずは健全な人間理性によりキリスト教を主体とする既成宗教の教義を再吟味して、超自然的なミステリーな部分を排除し、その合理主義を本来の「自然宗教」(die natürliche Religion)への復帰を求めている。そしてさらに宗教の本質をその道徳性に求め、その実践により有徳な人間を教化すべき一種の啓蒙的ないしは倫理的宗教を、理神論者は人類の最初の段階から存在するものと確信していた。それ故に既成宗教は超自然の事柄として、「啓示」「神秘」などのある特定の人為的な教理や儀式を付加して自然宗教を不純化し、墮落させたものと考えられた。キリスト教の場合には、歴史上のイエスの存在こそが本来の自然宗教の理念に適合するもので、むしろ彼は自然宗教の本来の目的のために賦与された神の使者として、人類の偉大な道徳上の指導者と見なしていた。かくして理神論のキリスト教解釈は、イエスを神の子たる「ペルソナ」として、福音書における彼の言動そのものを合理化し、倫理化したと思われるが、その予言や奇跡などの概念にはその实在性を否定していた。

このようなキリスト教解釈の特質に対して、レッシングは彼の遺稿集の断章『Das Christentum der Vernunft』(『理性のキリスト教』、ca. 1752)の中で、「理神論」という名称は用いずに、彼の所見を披瀝している。それによると先ずは神の定義より始めており、神とは「唯一の最も完全なる存在者」(das einzige vollkommene Wesen) (§ 1)⁽²⁶⁾として規定され、その永遠のうちにあらゆる完全性を所有し、その不可欠な存在によってあらゆる事物を創造した (§ 5)⁽²⁷⁾と論述している。このような自然神学ないし形而上学の立場から、本来の正統神学の「三位一体」の根本理念に合理的な解釈を試みたが、第二の主眼として彼は神の完全なる属性を備えた優越的な「存在」(Wesen)を推論し、それは一般的事物と同じ概念で「聖書」(die Schrift)において「神の子」(der Sohn Gottes, oder der Sohn Gott)の概念を規定したことである。この存在は神のあらゆる属性のうちから「神の実像」(ein Bild Gottes)と呼ばれ、直接には実名

を付してはいないが、神の「一人子」(ein Sohn)としてキリストの存在を指示していることは明確である。(§ 6, 7, 8)⁽²⁸⁾ 第三にレッスینگは「聖霊」(der Geist)については次のような論理の展開をなしている。もしも二つの事物が「相互に共通して」(einander gemein) いればいるほど、二つの事物の「調和」(Harmonie)は大きくなり、その最大の調和は二つの事物を結合して一つのものとなす (§ 9)、それらの「神の子」との関係は、神の同一の表象である。ここに聖書ではそれらの両者に存在する調和は「父」(Vater)と「子」(Sohn)との共存から「聖霊」(der Geist)の結び付きと考えられる。(§ 10) それ故にもしもこの「調和」が「聖霊」でないとすれば、父と子の存在、即ち神の存在もありえなくなる。逆説的に言えばかような「調和」が欠落して、神が存在しなくなるという矛盾に陥いらぬためには、この「調和」のなかに「三位一体」の神は必然的に存在せねばならない。(§ 12)⁽²⁹⁾ かくしてレッスینگは全能の神と世界の諸事物との有機的關係は、キリスト教神学における「三位一体」の神の理念をも含む理性論的解釈を考慮したものと言えるであろう。

このような神と事物との関係をさらに合理的に論究するならば神の属性としての諸事物は個別的な相違と「無限定な位階」(unendliche Graden)が存在している。然るにレッスینگの見解では、それらの事物の相違や位階には決して一つの「飛躍」(Sprung)も「亀裂」(Lücke)も存在せず、相互に連続している、⁽³⁰⁾ と言うのである。(§ 16) この「無限の連続」(die unendliche Reihe)こそ、ライプニッツ哲学の「連続性」の概念との類似性を有しているが、その完全なる神が、上位より下位の概念に至るまで、上位の「単純な存在」(das einfache Wesen)から無限なる下位の「複合的なもの」(das Zusammengesetzte)として、神の創造を理念付けているが、上位の単純な存在の方が「調和」の度合が大きく、世界のあらゆる現象の始まりとして考えている。(§ 20)⁽³¹⁾

さてここにレッスینگはキリスト教の時代的変遷についての一つの展望を、かような理性論的内容に即して、次のように語っている。

「ある将来にはこの点にまで、幸いなるキリスト教徒は「自然哲学」の領域を拡大するであろう。けれどもそのことは自然の中であらゆる現象が発見される時に、それは夥しく長い幾世紀もの後に、ようやくそのようになるのであり、その結果としてあらゆる現象が真正なものの根拠へと遡ってゆく以外には何もありえないのだ」 (§ 21)

Bis hierher wird einst ein glücklicher Christ das Gebiete der Naturlehre erstrecken, doch erst nach langen Jahrhunderten, wenn man alle Erscheinungen in der Natur wird ergründet haben, so daß nichts mehr übrig ist, als sie auf ihre wahre Quelle zurückzuführen. (§ 21)⁽³²⁾

と、以上の見解からして、いわゆる啓蒙主義の時代的変遷に至り、その自然像的な世界観は理神論的であるといえよう。そこにキリスト教徒はかような自然哲学を対象とするときに、その認識の領域をさらに拡大して単に神による位階の完全性を知るだけでなく、「行動する力」(die Vermögenheit zu handeln)との共存をも予知するものである。

「完全性を有し、それらを意識して、それらに叶う行動の力を有する存在は道德的な存在と呼ばれ、それは一つの戒律に追従できるものである」 (§ 25)

Wesen, welche Vollkommenheiten haben, sich ihrer Vollkommenheiten bewußt sind und das Vermögen besitzen, ihnen gemäß zu handeln, heißen moralische Wesen, das ist solche, welche einem Gesetze folgen können. (§ 25)⁽³³⁾

と、述べている。そしてこの戒律は存在するものの本性から派生しており、レッシングは個別的な主体性を各人に求めて、「なんじ個有の完全性に応じて行為せよ」(Handle deinen individualischen Vollkommenheiten gemäß! (§ 26)⁽³⁴⁾ という Individualismus (個体主義) の「道德律」を、ここに掲げている。

かくしてレッシングはこの小断章の最後の部分で人間の認識能力の限界を暗示しつつ本論を終了している。神は完全な存在者であるから、すべて存在するものの連続の中で「飛躍」を決して認めない。それにも拘らず人間の理解力

は単に上位の「単純な存在者」の調和を知るだけで、下位の「複合的な存在」には不十分な理解しか得られないが、上述した如き神の完全性はかような下位の存在者にも自然哲学の本質に適合していて、不合理に飛躍したものは絶対に含まない、と確信している。(§ 27)⁽³⁵⁾

この叙述から明確なことは、レッシングの理性認識による徹底した合理論は、いわばスピノザ的な神の本質を思い出させると言えよう。それは完全なる神の属性はすべての存在物の上位の存在から下位の存在に至るまで、「永遠の相の下に」(sub specie aeternitatis)⁽³⁶⁾に必然性を有し、「飛躍」を絶対的に否定するものであり、かような認識から、理論的な形而上学の特徴をここに極めて強力に表現したものである。その中では永遠の歴史のうちにキリスト教はその三位一体の理念、および啓蒙的立場からの自然哲学の尊重、そして人間の行動力を道德的存在としての戒律を、ここに理性認識に適合できるものとして想定するに至った。

再び *Retungen des H. Cardanus* を主眼とするレッシングの合理論の特徴は、その理神論的内容との比較、関連からその本質的意図を考え、さらに *Gedanken über die Herrnbuter* についても同じ立場から論述することにしよう。

まずは前者の問題からすると、レッシングがカルダーヌスの宗教比較の方法に批判的な見解を抱いたことから、本論の課題の発端が生じてきたといえよう。そもそもカルダーヌスが当時の教会当局から非難された理由は「正しい宗教の諸根拠を顧りみなかった」⁽³⁷⁾と言うので、その真偽についてレッシングは究明したのであったが、カルダーヌスの挙げたキリスト教の優位に関する四つの根拠のうち、その三つはキリスト教の歴史上の理由からであり、一つだけは理性論の根拠から、彼がキリスト教の強い擁護者であると、レッシングは考えていた。⁽³⁸⁾

さてここで問題となるのはカルダーヌスの「偽りの宗教の諸根拠を強調した」ことのコア部分で、レッシング自身は彼の公正な立場から必ずしもキリスト教を全面的には支持できずに、回教徒の主張を十分に受入れている。その内

容の中軸となるものは回教以外の三宗教の非合理的要素、即ち「予言」「啓示」「奇跡」の概念ではなくて、合理性と倫理性を基調としていた。従ってこのような観点から、彼はある種の普遍的な宗教として回教の根本教義やキリスト教の倫理性をその対象と考えていた。彼はそれらの不合理な概念に対して、次のような批判的な観点から論じている。

異教徒、ユダヤ教徒、キリスト教徒はさらに高い啓示に頼ろうとするが、その啓示の現実性は証明されないにも拘らず、彼らはそれによつて真理を受け容れようとした。だがかかる真理はわれわれの地上における理性の真理に属しているものではなく、彼らもそれを認識していたので「秘儀・神秘」(Geheimnis)と名付けていた。⁽³⁹⁾ この概念はそれ自体で矛盾を含んだ言葉として、最も粗野な感性的な概念を生み出しており、一般の人々に正当な創造主という観念を思考する能力を与えないので、人間精神に、信仰の怪物という名称の観念を植えつけてしまふ。そしてこのような信仰に「天国と地獄との鍵」(die Schlüssel des Himmel und der Höllen)が与えられて、有徳は信仰の同伴者でしかなく、そして「聖なる妄想の崇拜」(die Verehrung heiliger Hirngespinnster)は「義認」(Gerechtigkeit)なくして彼らに「浄福」(selig)ならしめている。⁽⁴⁰⁾

以上の内容からしてレッシングは「秘儀・神秘」の概念に具体的な事例を示し、厳しく批判しているが、ここに理論的内容が非常に色濃く描き出されている。その辛辣な表現からして、先述の非合理的予言・啓示・奇跡などの概念を排除して、彼はキリスト教の倫理性を除いては、回教の教義に真理の宗教的本質を見出していた。その概略については一章で論述したのでここではその具体的内容は割愛するが、レッシングの合理論による理神論的な特質との関連から少々述べることにしたい。

この課題についてレッシングは「奇跡」(Wunder)の概念を中心にして、それとの関連から、教祖マホメットの宗教的確信とその合理性に帰している。その叙述によると回教の根本教義は、先述の如く、唯一・創造神の信仰と来世での応報、の二つであるが、この簡明な教義においては、他の宗教のような「奇跡」の観念を無用としていた。その理由

はその根本教義が理性に適合しているので、誰にでも理解され、従って、その教義は伝達可能なものであるからマホメットには秘義としての「奇跡」は不要であった。他の宗教には多くの不合理な教義を説明するのに、かような奇跡を用いて、本来理解できないものを、「真実らしく」(wahrscheinlich) 見せるだけにすぎない。ここにマホメットの如き確信を以って各人がその「試金石」(Proberstein) として自覚するような教理には、何らの「奇跡」も必要ではないのである。その一つの実例は、新約聖書によれば、イエス自身が天の「父」から「神の子」であると聖別されると同時に、悪魔から誘惑の試練を受けた記述である。⁽⁴¹⁾ その点についてレッシングはかような悪魔の不合理な「奇跡」の強要を全く無意味なものと考えていた、と言うことになる。

それに対して回教のマホメットは「神は唯一であって、我はその予言者である」と宣言した場合に、何らの業も必要としないのは、回教徒の言語の捉え方が独特で、僅かな事柄にも大げさなアレゴリーの表現を用い、一切を字句通りに解釈をするので、そこには神秘性や超自然性という観念は、彼らには意識外の問題であつたとし、⁽⁴²⁾ このような見地からレッシングは宗教における回教の純粋な合理的特質を感じたものと言えよう。

最後にレッシングによる、カルダーヌスのキリスト教観と、小著作 *Gedanken über die Herrnhuter* に関するキリストの倫理性についても少々述べてみよう。一つの著作に共通する当課題は彼自身のキリスト教に対する見解であり、その中軸となるものは、新約聖書の記述のうちにイエス・キリストの「山上の垂訓」(マタイ、五・一—一〇) などの道徳的な教えに、傾倒しており、予言や奇跡などの超自然の概念には、否定的な見解を表明していた。かような見地から先述したようにレッシングはカルダーヌスのキリスト教擁護の一環として、次のように語っている。

……彼(カルダーヌス)はキリスト教の道徳についてその卓越性を促している。そしてキリストだけが、あらゆる有徳の完全な師匠であることは明らかだ、と述べている。「ラテン文……彼(キリスト)の生涯については、たとえそれが最も優れた

ものであったも、キリストとこの点に関しては、誰も張り合うことはできないのである。けれどもその龜鑑を各人が模倣することはできる。……」

· dringt er (Cardanus) auf die Vortrefflichkeit der christlichen Moral und sagt klar, daß nur Christus das vollkommenste Muster aller Tugenden sei: [Illius vitam aequare nemo, quamvis optimus, imitari autem quilibet potest...]⁽⁴⁾]

以上の所見から、レッシングはキリストの現存のあり方について、実証的な倫理性に大なる意義を見出している。ここにカルダーヌスのキリスト教の擁護を通して、その既成神学の伝統的権威とは別に、彼個有の批判的精神により、自然道徳を擁護すべく強調した。

かような立場をさらに論述するならば、小著 *Gedanken über die Herrnhuter* においても、その啓蒙主義の進歩的な歴史観より、彼は同様にキリストの出現と生涯の意義について論じている。その根本的理念は、先述の如きヘルンフート派の現状から過去へ遡って、各時代の現実における人間のあり方をめぐり、「学術的なもの」(Gottesgelahrtheit) と「実用の知恵」(Weltweißheit) との一致融合を目指して、彼はキリスト自身の存在をその時代との関連から、客体化するように考えていた。かような歴史上の視点からレッシングはキリストの到来を、「機械仕掛けの神」(Theos ἀπο μηχανής) という「不死なるもの」(kein Sterblicher) として、⁽⁴⁴⁾ 旧約時代の暗闇から出現したその意義を、次のように述べている。

「キリストはかくして到来した。私(レッシング自身)はここに彼キリストを神に心眼を開示された一人の教師として、崇めてもよいことを、許し給え。彼の意図は、その(旧約の)宗教を純化して再興し、その宗教が一層有益で、遍ねく成果を生じれば生じるほど、逆にそれだけ偏狭になって、その限界のうちに閉じ籠ってしまふのではなかったのか」

Christus kam also, man vergönne mir daß ich ihn hier nur als einen von Gott erleuchteten Lehre ansehen darf, Wasen seine Absichten etwas anders, als die Religion in ihrer Lauterkeit wiederzuerstellen und sie in diejenigen Grenzen

einzuschließen, in welchen sie desto heilsamere und allgemeinere Wirkungen hervorbringt, je enger die Grenzen sind?⁽⁴⁵⁾

このような叙述のうちに、彼はキリストを旧約の予言による「救世主」として、特別な啓示とは考えておらず、またキリスト教がユダヤ教の偏狭な枠を破った事実に対しても、後世の歴史上の事実や護教の神学によるものとして、現存中のキリスト自身にその意図があつたか否かを確信してはいなかった。レッシングの意図はそれとは別に、聖書を一つの価値ある書物として、その「教え」(Lehre)の中心を「自然道徳」におき、キリストを「神に心眼を開示された教師」(ein von Gott erleuchteter Lehrer)として位置付けている。ここにその思考内容の本質は、まさに理神論的特質を備えたものと考えられ、彼の初期の著作のうちにその傾向を見出すものである。

後 記

このように初期レッシングの著作、*Rettingen H. Cardanus* (1754)を主軸として、*Gedanken über die Herrnhuter* (1751)と、小断章、*Das Christentum der Vernunft* (ca. 1752)より、その広い意味での「合理論」について、多角的な視座を拠点に、その一端を述べた次第である。終りに臨んで、彼の後期宗教思想への発展的意義を概略し、今後の研究に何らかの指針を与え、それを展望しておきたい。

上述の著作を通して、レッシング特有の「弁護」(Rettung)の概念を取上げ、また初期の著作に漲っている「理神論的」な傾向を追求してゆくと、そこに彼の「合理性」と「倫理性」を基調とする、既成宗教への批判精神の高揚が如実に感じられる。かような見地から彼の普遍的な宗教理念は、十八世紀ヨーロッパの知識層に拡大した合理的宗教思想としての「理神論」に顕著なる傾倒が見られるが、そのうちから次の著作は彼の後の思想形成に少なからず影響を及ぼしたものと言われる。彼がライプチヒの遊学時代(1746—1748)にイギリスの理神論者、M・ティンダルの *Christianity*

as old the Creation⁽⁴⁶⁾ (『創造とともに古いキリスト教』)や、本論の「弁護」の基盤となった *Dictionnaire historique et critique*⁽⁴⁷⁾ (1795—1797) (『歴史的批判的辞典』)の著者、P・ベールなどを通して、父祖伝来のルター派正統信仰の教理内容に懐疑を抱き、理性による批判の対象として、真のキリスト教のあり方を模索していた。

ここに彼はかような理神論の特質を有する普遍的な宗教の合理的内容を、「既成宗教の相対性」および「寛容の精神」という実践的な神学上の課題として考えていた。そのことは彼の最晩年の著名な戯曲 *Nathan der Weise* (1781) (『賢人ナタン』)において、宗教の本質をその道徳性に求めるときに、個人がいかなる宗教を信仰しても有徳の人生を送るならば、その倫理的実践たる「寛容」(Toleranz)および「博愛」(Philanthropie)の精神を得ることによって、それが可能であることを表現しているものであり、また彼の神学的対話 *Ernst und Falk* (1781) (『エルンストとファルク』)における「世界市民たること」(Weltbürgertum)の概念は、すぐれた個人が偏狭な宗教や国籍を超えたものであるという、かような理念を基に貫徹している。

このような十八世紀のドイツ啓蒙思想のうちで、彼の著作の精神に影響した「理神論」のその最も典型的な事例は、著名な神学者、ライマールの同じ立場の著作、*Wolfenbüttel Fragmente*の公表によって、正統派の牧師、ゲーツェとの激烈な論争⁽⁴⁸⁾を交した後に、教会当局から糾弾されたことは周知の事実であった。かような理由とは別に、彼は理神論に対して常に積極的にはその名称を用いなかったが、⁽⁴⁹⁾そのことは二つの理由があったと思われる。先ずはその思想の等質的な単調さにより、レッシング自身の真意に必ずしも適応しえなかったことであり、⁽⁵⁰⁾さらには当時の現実問題として、教会当局との軋轢を彼自身が考慮したからに他ならなかった。いずれにせよ彼がこの思想からの種々の影響は非常に大であったと、言うべきであろう。

再び彼の心情的な、「弁護」の概念より、さらに敷衍するならば、先述の本論の著作以外にもその精神を継ぐ著作として、当時少なからず影響のあった *Neologie*⁽⁵¹⁾ (新教理学)の神学者、J・エーベルハルト⁽⁵²⁾との論争の著作、*Leibniz*,

von der ewigen Strafen⁽⁵³⁾ (『ライプニッツ、永遠の刑罰について』)の中で、彼がライプニッツの宗教哲学、*Essai de Théodicées* (1710) (『神義論』)の主張を擁護していたことは言うまでもない。かようなネオロギーの性急なる批判や些細な論駁に対して、彼はむしろ「正統信仰」(Orthodoxie)⁽⁵⁴⁾の側に立っていたのである。

かくしてレッシングの初期宗教思想および神学の課題として、本論ではその基本理念を、彼個有の心情としての「弁護」の概念より、その歴史上の正当化と批判、吟味を通して、彼の内面の主張を、ここに表現してきた。またそれらの著作の合理的解釈から「理神論」との関連を中心に論述したが、その他当時の正統信仰や、ラディカルなネオロギーに対して、彼は自己の主体的立場から論争していた。

このようにレッシングの初期の三篇の著作からは、個有の思考方法、およびその確立を目指す独自の思想上の原型が理解され、そして各著作の個性を見出すことができる。そしてここに述べた彼の後年の主要な作品との間には、必ず類似性があり、そこに彼の思想の特質が明白に表現されているのである。かような観点を予期して、今後さらに彼の「合理論」に根ざす宗教および倫理思想の充実を一層画りたいと思う。

注解と参考文献

- (1) その他『*Rettungen des Horaz; Rettung des IN EPTI RELIGIOSI und seiner ungenannten Versers; Rettung des Cochlius, aber nur in seiner Kleinigkeit*』の三篇がある。
- (2) *Einführung in Lessings theologisch-philosophische Schriften II, K, Beyschlag*. Insel Verlag, S. 600.
- (3) 邦訳では『微細なものごとについて』の十一書のなか。 *De propria vita*, Hieronimi Cardani (ヒエロニムス・カルダーヌスの『自伝』)の略年譜では、彼が一五七〇年に異端審問で投獄された、と言われる。

- (4) Lessings theologische-philosophische Schriften II, Insel Verlag, S. 250-251 (L. S. II と略す)。
- (5) Ibid., S. 252-253.
- (6) Ibid., S. 253-254.
- (7) Ibid., S. 256.
- (8) Ibid., S. 258 ミテヘ語の部分の独訳 Die Gebote Christi enthalten nichts, was der Moral — oder Naturphilosophie widerstreitet.
- (9) Ibid., S. 259.
- (10) Ibid., S. 261.
- (11) 後年レッシングは *Die Religion Christi* (1781) と *Die christliche Religion* との決定的な区別により、前者を真正とし、後者を批判した。
- (12) L. S. II, S. 262.
- (13) Ibid., S. 263.
- (14) 一七四九年五月三〇日の父親宛の書簡では、彼の父とは信仰問題で悶着を起していた。彼は正統キリスト教徒が単に父祖伝来の慣習を守るだけで、真実の福音の教えである「愛」の実践（ルカ、六・二七―二八など）に対して、現実上の疑問を感じていた。
- (15) ドイツ敬虔主義 (Pietismus) の一派。その発祥は十五世紀の先駆者、フスの意志を継ぐモラビア兄弟団 (Mährische Brüder) の直系の一派が、一七二二年以来、ツィンツェンドルフ伯爵の保護のもとに、ザクセンのオーペランザッツに Herrhut (主の守り) というセツツルメントを結合して、同派を設立した。
- (16) 十七世紀末から十八世紀前半のルター派正統信仰に対する改革運動である。教義より「敬虔な」(pietistisch) 実践を重視して、平信徒の覚醒を呼び起し、近代神学への道を開いた。
- (17) (16) に準ずる。なお彼らは三十年戦争後の約一世紀後に信仰の自由を求めて、チェコのコラビアから移住した。聖書に基づいて信仰の規律と教育を重じ、外国伝導に力を注いだ。

(18) ルター派教会の信仰告白であり、宗教改革中の一五三〇年に新旧両派のドイツ国内の教会和解の解決が主要問題であった。

(19) ここではルター教会が支配した神学。アウグスブルクの講和(一五五五)から敬虔主義の生じた頃(十七世紀末)までが最盛で、次第に教義学と弁証神学が硬直化し、実践活動が欠如していた。ヘルンフート派との困難な関係もここに帰因していたのである。

(20) L. S. II. *Gedanken über die Herrnhuter, Entstehung*. S. 621.

(21) *Ibid.*, S. 239.

(22) *Ibid.*, S. 243.

(23) *Ibid.*, S. 243.

(24) *Ibid.*, S. 243.

(25) 十七世紀イギリスで発祥した自然的神学。その主題は、啓示、予言、奇跡など超自然の概念を、理性の立場より批判し、宗教の本質を合理的な認識に適合しうる倫理、寛容の実践性を強調した。さらには政治、社会思想にも影響したが、十八世紀中頃より衰退していった。

(26) *Deutsche National-Literatur Lessings Werke, Lessings Nachlaß, Erster Teil*. S. 301.

(27) *Ibid.*, S. 302.

(28) *Ibid.*, S. 302.

(29) *Ibid.*, S. 303.

(30) その「連続」(Reine)の概念は、ライプニッツの *Neuveau-Essais sur L'Entendement, Preface*. P. 49, Die philosophischen Schriften, V. Herausgegeben von C. J. Gerhardt, Berlin 1882.

Rien ne se fait tout d'un coup, et c'est une de mes grandes maximes et des plus véritées que la nature ne fait jamais des sauts; ce que j'appellois La Loy de la Continuité, j'en parlois dans les premiées Nouvelles de la Republique de lettres. の部分を拾っている点に照むべし。

- (31) Lessings Nachlaß, Ersten Teil S. 304.
- (32) Ibid., S. 304.
- (33) Ibid., S. 305.
- (34) Ibid., S. 305.
- (35) Ibid., S. 305.
- (36) Spinoza, *Ethica* II, P. 44, C II (ベプヘザ'『倫理学』二部'定理'四四'注解'二) Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1967 S. 234. De naturâ Rationis est res sub quâdem aeternitatis specie percipere. D. (証明) De Natura enim Rationis est res, ut necessaria, et non, ut contingentes, contemplari. hæc rerum necessitas est ipsa Dei æternæ naturæ necessitas; ergo de naturâ Rationis est res sub hâc aeternitatis specie contemplari.
- (37) L. S., S. 256.
- (38) Ibid., S. 253, 261.
- (39) Ibid., S. 262.
- (40) Ibid., S. 263.
- (41) 新約聖書では、ヨハネより洗礼を受けたイエスが「神の子」となったが(マタイ、三・十三―十七、マルコ、一・九―十一)「悪魔が「神の子」にできる業を、彼に要求して試鍊を与えた(マタイ、四・一二―十三、マルコ、四・一二―十三)ことを指示している。
- (42) Ibid., S. 263.
- (43) Ibid., S. 258 ラテン語の部分の独訳 Was sein Leben anbelangt, darinne kann es ihm niemand gleichum, und wenn es auch der allerbeste wäre; aber es nachahmen kann ein jeder.
- (44) Ibid., S. 241.
- (45) Ibid., S. 241.
- (46) 本著は「理神論」のバイブルといわれ、J. L. Schmidt によるドイツ語訳(一七四一)があり、ドイツ啓蒙主義の神学

に少なからず影響を与えた。

- (47) レッシングは本著の「カルダーヌス」の項に大いなる関心を示し、*Retungen des H. Cardanus* (1754) を研究する糸口になったものである。

- (48) J・M・ゲーツェ (Goetze) (一七七一—一七八六) はハンプブルクのルター派正統神学者、主任司祭。レッシングがライマルスの『断章』を公表した結果、ゲーツェの非難と干渉に端を発して、神学上の論争が生じた。彼は後期神学の一連の論争の著作、*Eine Parabel, Axomata, Eine Duplik* として *Anti-Goetze* など、いずれも一七七八年に公表した。

- (49) 「理神論」(Deismus) なし「理神論者」(Deist) という直接のタイトルを有する著述は断章、*Die Fragmente eines Ungenannten, Von Duldung der Deisten* (1778) の他は見当たらない。

- (50) 例の H・S・ライマルス (Reimarus) (1694—1768) の遺稿 *Wolfenbüttel Fragmente* (『ヴォルフエンヴィッテル断章』) の理神論的な聖書解釈は、冷徹な理性論理で透視されているが、そこには内面的真理としての宗教の本質が希薄で、また聖書の歴史的価値にも乏しく、レッシングの聖書解釈の真意とは相違していた。

- (51) 十八世紀後半のドイツ啓蒙主義神学として、啓示と理性との一致を認めながら、啓示の内容を理性的真理として包含させた。自然神学とキリスト教の宗教的本質との一致を究明して、その倫理性への傾斜を強めた。(K. Aner, *Theologie der Lessingszeit*, Hildesheim, 1964, S. 4, S. 155 ff.)

- (52) J・A・エーベルハルト (Eberhard) (1739—1804) ネオロギストの一人で、ハレ大学の神学教授、著作、*Neue Apologie des Sokrates* (1772) に対して、レッシングが異議を唱え、ネオロギー批判をした。

- (53) 本著については、レッシングが「永遠の刑罰」(die ewigen Strafen) の神学上の解釈をめぐってエーベルハルトとライプニッツとの関連や詳細については、拙稿『飯山論叢』(東京工芸大学女子短期大学部、創刊号、昭和五九年三月) を参照されたい。

- (54) 一七七四年七月十四日、弟カール宛の書簡の中で、レッシングはネオロギーの急進性と脆弱性を批判して、むしろ正統信仰の保守的な宗教的意義を擁護している点が目に付く。